

199 共焦点内視鏡による消化管粘膜下腫瘍の生体内病理観察

大谷 友彦

プローブ型共焦点レーザー顕微内視鏡 (probe-based confocal laser endomicroscopy: pCLE) は、内視鏡を介した生体内組織観察を可能とする新たな診断機器として注目されている。今回、胃粘膜下腫瘍の診断における、pCLE の有用性について検討した。まず、当施設で胃粘膜下腫瘍に対して胃局所切除を施行した6症例 (神経鞘腫3例、GIST 3例) の切除検体を用いて、*ex vivo*での pCLE 観察を行った。さらに、胃粘膜下腫瘍を有する3症例 (平滑筋腫3例) に対して、粘膜下トンネル法を併用した生体内 pCLE 観察を施行した。腫瘍別の pCLE と Hematoxylin & Eosin (HE) 染色標本における所見一致率は、GIST と神経鞘腫を合わせた群 (GS 群) では、平滑筋腫との間に有意な差を認め (88.9 % vs. 44.4 %, $p=0.036$)、HE 染色に近い所見が得られる可能性が示唆された。CLE 1 視野の平均細胞密度は GS 群では 55.2 ± 15.2 cells/ field、平滑筋腫では 17.3 ± 3.2 cells/ field であり、こちらも有意差を認めた ($p=0.024$)。平滑筋腫は細胞密度の低さが特徴であり、CLE 画像においても同様の所見が得られた。

GIST における pCLE 画像 (左) と HE 染色標本 (右) における所見

